

文献紹介・自著を語る

『日本語学校物語—開拓者たちのライフストーリー—』

三代純平・佐藤正則 編

(2024 年 12 月、ココ出版)

三代 純平

本書は、日本語学校に長らく携わってきた 8 名の日本語教師（江副隆秀，小木曾友，奥田純子，加藤早苗，嶋田和子，西原純子，緑川音也，山本弘子）への 9 年間に及ぶインタビューを編集したものです。1980 年代，「留学生 10 万人受入れ計画」，バブル経済などを背景に多くの日本語学校が開校しました。日本で学ぶ外国人学生が急増し，現在の日本語教育につながる基盤が形成された戦後日本語教育の黎明期と言えます。その頃から（あるいはそれ以前から）日本語教育に従事し，第一線で活躍されてきた日本語教師たちのライフストーリーを通じて，日本語学校で日本語教師をするとはどういうことかを改めて知ってもらう，あるいは共に考えてもらうことを目的に本書は編集されました。彼らの足跡を辿り，日本語教育といかに向きあってきたかを知ること，知識や能力を超えた，生き方としての日本語教育の専門性を共有したいと願っています。

本書をつくる契機となったのは，「箱根会議」をめぐるライフストーリー研究です（三代・佐藤 2018）。日本語教育史の教科書などには登場しないが，日本語学校の関係者たちの間では密かに語り継がれている，日本語学校の歴史のターニングポイントとなった，いわば伝説の会議，それが「箱根会議」です。正式名称は，第 1 回日本語教育セミナー，日本語教育振興協会によって 1997 年 10 月 30 日，31 日，二日間に渡り，文部省共済組合の保養宿泊施設で開催されました。そこには，日本語教育振興協会に加盟する日本語教育機関 30 校から，校長，教務主任など 30 名が参加しました。一同が車座になって，朝まで「温泉にも入らずに」日本語教育の未来について語り明かしたそうです。先生方によると，このとき初めて，日本語学校は共に「日本語学校」という社会的アイデンティティをつくらうと連携したと言います。

外国籍住民が 300 万人を超え，日本語学校は 900 校を超えました。認定日本語学校，登録日本語教員と新しい制度が動き出した今だからこそ，黎明期からは箱根会議までの記憶

を共有し、先人たちが築いてきた日本語学校の歴史から学ぶことに意味があると私は感じています。これは、いわば、日本語学校、日本語教育という文化の継承であり、もう一つの日本語教育史だと考えています。

本書は、いわゆる学術書ではありません。気軽に手にとって、先生たちの語りに耳を傾けながら読むことができると思います。しかし、これは私にとって、同時に新しい研究のアウトプットの形の探求でもあります。私は長くライフストーリー研究と実践研究に携わってきました（細川・三代 2014, 三代 2015）。そこでは、常に研究者、研究協力者、読者の関係性、そして研究成果をどのように現場に還元していくのかについて問い直し続けてきました。その中で、たどり着いた一つの形が、研究協力者（つまりインタビューにこたえてくださった先生方）と語りを共同編集し、一人称の語りで表現することです。また、分析や考察という形ではなくエピソード、ナラティブとして読者に体験してもらうことです。転換期の日本語教育において日本語教育の専門性が活発に議論されています。どのような知識、能力、態度が必要なのか、日本語教師の質をどのように向上させるのか。当然、このような議論は必要です。ただ一方、この議論が分断を生んだり、教育の力を教師個人の力へと矮小化したりしてはいけなないと考えています。私たち日本語教師は、連帯し、共にいい教育の創造をめざしていかなければなりません。そのためには、日本語教師たちで自分たちの文化を継承し、さらに発展させていくことが必要です。その中心にあるのは、知識や能力ではなく「想い」だと信じています。そんな想いを共有するためにつくられたのが本書です。その目的が本書によって達成できるのか、私にもわかりません。だからこそ読者とこの経験を共有し、さらに議論していければと考えています。

（参考文献）

細川英雄，三代純平（編）（2014）『実践研究は何をめざすかー日本語教育における実践研究の意味と可能性』ココ出版。

三代純平（編）（2015）『日本語教育学としてのライフストーリーー語りを聞き、書くということ』くろしお出版。

三代純平・佐藤正則（2019）「日本語学校の社会的アイデンティティ構築の歩みー「箱根会議」という経験をめぐるライフストーリー」『言語文化教育研究』17， pp. 169-189.